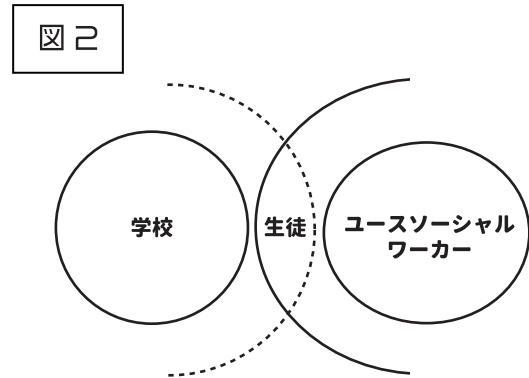


**(横井氏)** リスクの高いケースほど、学校内での情報共有やどういったことをすべきかなどについて、迅速に協議して欲しいと思います。

**(事務局)** 学校側もY SWに問題解決を依頼すれば「何とかしてくれる。」という依存のスタンスではなく、「自らの学校に所属する生徒に対する指導(支援)責任は学校にある。」という意識を明確に持ち続けてほしいと思います。



**(土屋氏)** Y SWは外部から関わり連携・協働していくわけですが、その際「学校にできることは全てやり尽くした。それ以上のことは福祉の専門家に任せればよい。」と言われることがあります。学校がどこまでを「外部」だと考え、どこからを「内部」と考えているのかを正確に示すことは難しいのですが、図にしてみると左の図2のようになります。

この意識の背景には「教育-福祉の二分論」ともいべき考え方があります。しかし、これでは問題解決の方向に向きません。

Y SWは、学校(教員)-生徒間の関係を基本軸として、側面的・

作図：土屋佳子氏・横井葉子氏

後方的に関わる必要があります。それを図式化したものが、図3です。

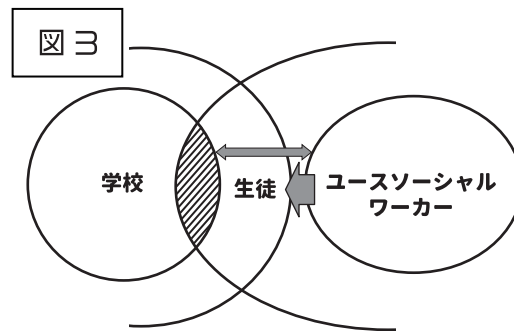
この斜線の部分が非常に重要で、学校側には常に生徒に対する責任を有し、かつ、学校(教育)という仕組みにしっかり生徒を内包するスタンスをとって欲しいと思います。教育の保障の観点からも、支援に関係する者全てが、それぞれ認識することが、今後の「自立支援チーム」派遣事業の成否を分けるポイントになってくるのではないのでしょうか。

**(横井氏)** 私も今の話を聞いて全く同じことを考えていました。図2では、何らかの課題を抱える生徒が学校システムの外側に置かれてしまうこととなります。こういった状態では、Y SWは課題解決の取組を学校(教員)から「請け負う」形になってしまいます。この場合は、Y SWとして感じる孤立感、アウェイ感も強く、成果も出にくい。やっけてなかなかむなしいものです。

図3では、学校(教員チーム)と当該の生徒が接点を持ち、課題を共有しています。Y SWは学校(教員チーム)とのやり取りを通じて協働しながら、生徒に働き掛けています。

**(事務局)** 先ほど、「個に応じた支援」が必要といったお話がありました。そのためには、学校側が、支援が必要となる生徒に関する情報を整理し、自立支援チームと共有する体制を作ることが大切です。

**(土屋氏)** 情報の集約と整理、適切な共有の体制を学校の中で作れば良いのですが、これは義務教育の学校



作図：土屋佳子氏・横井葉子氏

でもなかなか難しいことです。ただ、情報共有ができる学校と、そうでない学校とでは、Y SWの導入の効果が大きく違ってくると思います。ちなみに、ここでいう「情報」ですが、生徒や保護者のニーズを反映させたものでなければなりません。

あまり学校にも負担を掛けられないと思いますが、本当は学校での支援体制づくりができるのが理想です。教育相談の担当者や養護教諭が要となって正確な情報の集約だけでもしていただくことを切望します。

**(横井氏)** 学校が集約した生徒支援に関する情報を、Y SWと高校で共有できることが仕組み化できるといいですね。



**(事務局)** そういうことを仕組み化するだけでも違いますよね。その役割を期待されているのが自立支援担当教員だと考えています。これまでは、自立支援担当教員の役割に関するガイドラインをきちんと示していなかったのですが、次年度からは、自立支援担当教員の具体的な役割を示していくことも必要だと思っています。

例えば、ケース会議の主催や生徒が抱える課題、学校生活の状況を担任や学年の先生方から聞き取って全体の状況を把握しておき、自立支援担当教員に聞けばある程度の情報は知っているという状況を作ることが重要だと考えています。

また、巡回型を今年度から取り入れてみましたが、巡回型というのは、なかなか学校と関係を作るのが難しいと感じています。他県などはどのような体制なのでしょう。

**(横井氏)** 現在一番多いのは広い区域をカバーできる派遣型ですが、配置型を推進するのがよいと考えているところは配置型をやっています。それらに比べると、巡回型はあまり多くないと思います。学校は慣れない間はY SWの役割や動きが分からず、巡回が年間計画の中に入ると、それに備えて生徒に関する話題を用意して、話題を提供すればそれで終わりと考えてしまいがちではないでしょうか。

**(土屋氏)** そうなると、学校側としては話題を提供したのにY SWは何もやってくれないという思いがすごく強くなってしまいうでしょうね。

**(事務局)** 要請派遣は、課題が生じて困っているということがあって、学校側の主訴がある意味、明確になっている。学校は「何とかしたい、何とかして欲しい。」という問題意識があるという状況で支援に入っていける。

一方で巡回型は、学校のモチベーションがあまり無く、「必要性がないのに何しに来るの。」みたいな状況になりやすいということでしょうか。

**(横井氏)** そういう、もともとのモチベーションの違いはあると思います。しかし、派遣型でやっている限り、1回も要請が来ない学校もあるので、アウトリーチして学校の様子を把握するという目的ならば、巡回型にも大きな意義があるのではないのでしょうか。